

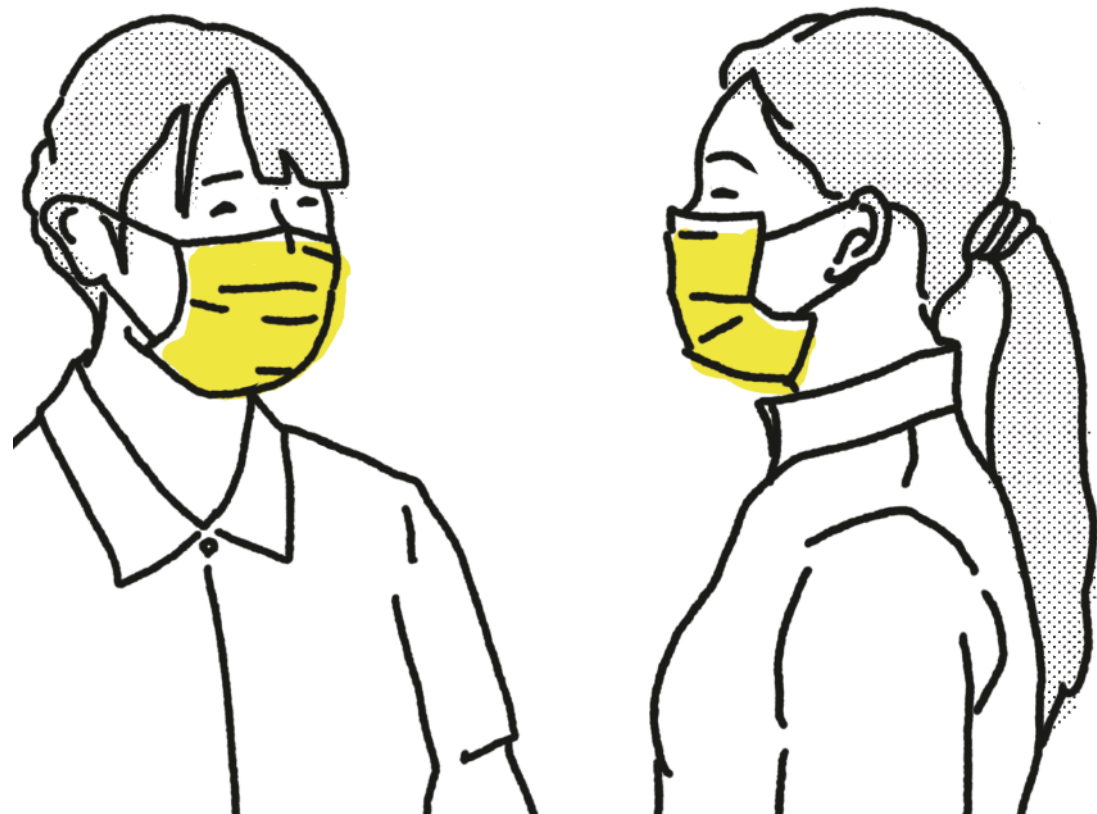
コラボ!



特集

コロナに負けない! 市民活動の新しいかたち

創刊号



コラボ!

このまちに住んでよかった。
長浜に暮らすみんながそう思えるように、さまざまな団体や個人が活動しています。その活動のかたち＝「長浜の市民協働」の今をお伝えしていくのが、この通信です。
紙面の企画・編集・取材執筆・デザインはすべてながはま市民協働センターコーディネーターが担っています。

発行

ながはま市民協働センター
滋賀県長浜市高田町12-34さざなみタウン ながはま文化福祉プラザ
tel.0749-65-6525
8:30~21:30 (火曜休館)
mail:katsudou@city.nagahama.lg.jp
http://www.nposhiga.com/



コラボ!

こちら市民協働センターです!

Vol.01



▲相談を受ける大川co。ご予約いただけるとスムーズに対応できます

市民協働センターの役割をごく簡単に説明すると「市民が、社会のためにやってみたいことを実現するための活動や、地域づくり協議会活動を応援するところ」です。応援の仕方はさまざまで、応援部隊として現在4人のコーディネーター(以下CO)がいます。COには専門分野があり、それぞれの専門に応じて相談を受け具体的な手立てをお伝えしています。

今回はそんなCOに迫る第1弾として、大川千里COを紹介。元行政書士で、ファンドレイザー(非営利団体の資金調達を行う役割)の資格保持者。非営利法人の設立や市民活動の資金確保についての相談に応じます。

また、現在2児の母として子育て支援にも関心が高く、学校の枠を超えた地域での学びの場の仕組みづくりを担当。さらに「つながりづくり」として「コミュニティカレッジ」を主導し、人と人や活動団体同士の交流の場運営にも熱心です。

趣味のひとつは水族館巡り。なかでも名古屋港水族館の「水中観覧席」で見るイルカがお気に入りです。

付せん

編集後記

ようやく第1号が発刊できました。これから年に4回お会いする予定です。

ながはま市民協働センターってご存知ですか? 平成28年にながはま市民活動センターとして発足し、昨年12月名称をリニューアルし、さざなみタウンに拠点を移した市の組織です。

「協働」って言葉、難しいですよね。今年4月に施行した「長浜市市民協働のまちづくり推進条例」では、地域づくりを解決するために、互いを尊重し、対等の立場で協力して共に活動すること、とされています。

現状を見ると、想定以上の急激な人口減少や、少子高齢化の進展、地域での人と人との関わりの変化に伴い、家庭や自治会、行政それぞれ単独での地域の困りごと解決が難しくなっています。

このため、市民や地域づくり協議会、市民活動団体、事業者、市などの多様な「担い手(主体)」で、浮上している課題の解決をめざすことが今後必要です。

そのときに担い手同士が連携・協力し、それぞれの力を最大限に発揮できるようにしたいですね。そのために担い手を増やし、さらに担い手同士の連携(つながりづくり)を支援できるような仕組み(組織)が必要です。これを担うのが、ながはま市民協働センターであり、担い手づくりのための人材育成講座やつながりづくりのマッチング業務、市民活動相談などを行なっています。

今後、協働の仕組みづくりについて、より詳しく迫ります。市民協働に関して、いろんな意見がいただけたら、お待ちしています。

(コーディネーター 田中)

オンラインコミュニティ・カレッジへようこそ!



3ページでも紹介している「ながはまコミュニティカレッジ」(以下コミュカレ)のテーマは「みんながセンセイ、みんながセイト」。

自分の特技や専門的知識を教えたい、知ってもらいたいという思いをセンセイになって実現してみませんか? また関心があれば誰もが気軽にセイトとして受講できます。講座を通じて共感しあえる仲間を見つめられるのも魅力です。



開催 月に一度程度
講座内容 事前に市のホームページやフェイスブック等で告知
問い合わせ センセイへの応募は市民協働センターへ



特集
TOPICS

コロナに負けない！ 市民活動の新しいかたち

「感染拡大」「3密」「ソーシャルディスタンス」「自粛」……。社会・経済活動と同様に、市民活動も休止に追い込まれてしまいました。自粛が解除されても、「今しなければならぬのか」「人と接することが不可欠なのにどう取り組んでいいかわからない」「他の活動の様子をみよう」、市民活動に関わる人からはそんな声が聞こえてきました。

そんななかで安易にやめてしまうのではなく、新しい生活様式に合わせ創意工夫して取り組んでいく必要があります。またこの事態に伴って新たな地域課題も浮上しています。

今回は、感染防止のガイドラインを守りつつ、手法を変え継続したり、新たに始まったりしている取り組みのいくつかをご紹介します。



▲子どもだけでなく保護者にもいつときの清涼剤のようなイベントになった

03 まちに笑顔を取り戻す

米川に浮かべたペットボトル製いかだ。親子が乗っても沈むことなく、歓声が起きました。中心市街地のまちづくりを担う長浜地区地域づくり連合会(以下地連)が取り組む「米川・かわまちづくり」の「コマです」。

一帯を流れ、かつては暮らしのそばにあった米川を、改めて地域の「顔にし」交流の拠点にと、昨年から検討を重ね、今年度は住民参加での川遊びを通じて地域を見直そうとしました。

そんな矢先の緊急事態宣言。商店街や果壁スクエア一帯の店舗は休業、学校は休校になりました。自粛解除後もイベントが中止となるなか、地連ではマスクや消毒など感染予防を万全にして、いかだ作りと試乗会を決定。これまでも地域の子どもの居場所支援にも熱心に取り組んできたこともあり、ストレスをためこんでいるであろう子どもたちの笑顔が生まれる機会にしたいとの思いからでした。ただ、再びの感染者増を受け、ほかの川遊びは延期を決定。このような状況下でいかに地域が前向きで元気になるか、地連の模索は続きます。

01 買い物支援で 高齢者の孤立を防ぐ

高齢者やしょうがい者のちょっとした生活の困りごとを手助けする西黒田地域の「きんたろうサポート会」。西黒田ふるさと振興会議の取り組みで、地域住民がサポーターを担い、現在80人ほどが登録しています。

このなかの買い物支援サービスは、車がなく買い物に行くのが困難な高齢者を、サポーターがスーパーなどへ同行するサービス。緊急事態宣言中も継続を決定し、全員がマスク必携、事前の検温・消毒実施、さらに一度の参加定員を6人以内(多いときは分散)での出発をルールにしました。継続に踏み切ったのは生活支援はもちろん、自粛による独居高齢者などの孤立の懸念がありました。制限された形でも近所の人と交流ができ、「好きなものを自分で選べる」楽しみでストレスの解消になればとの思いも。住民から利用の申し込みがあることは、元気に暮らしている何よりの証拠なのです。



▲行ってきた一すつと皆笑顔。サポーターのつきそいで出発

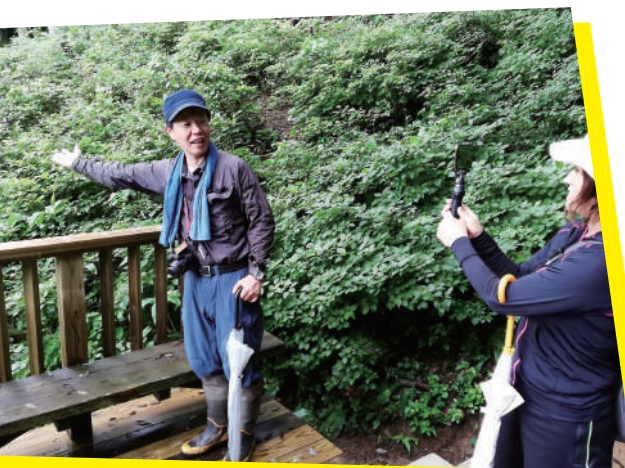
04 オンラインを活用

滋賀県一の湿原を現地から解説、好感をもたれる話し方やおいしいハイボールの作り方を伝授……。どれもパソコンやスマホの画面を通じた「センセイ」によるレクチャーで、6月から月に1度で開催されている「オンラインコミュニティカレッジ(以下コミュニティ)」の一場面です。

コミュニティは、市民自らがつく知識や特技をセンセイとして教え、市民が「セイ」として講座を受ける学びと交流の場。昨年度市民実行委員会が主催し、「学校」に見立てたながはま文化福祉プラザで約60の講座が行われました。今年度も継続するにあたって、感染拡大防止のためビデオ通話アプリを利用したオンライン形式に変更。

オンラインはインターネットがつかえれば、誰もが受講でき、センセイは場所を選ばず発信できるので内容に即した臨場感のある講座ができることが新たな魅力に。オンラインを効果的に活用することで、今後の会議や講演企画などの場面で新しい手法となるはずだ。

▼実行委員が撮影を担当しての、収録タイプの講座も
※厚労省のガイドラインに基づき、屋外ではソーシャルディスタンスを保ちマスクは外しています



02 食を循環させて 困窮者支援

感染拡大防止に伴う自粛の影響で経済的支援を必要とする世帯が増加。今だからこそ地域で支えあい助け合う関係を築こうと立ち上がったのが、「ながはま おもいつながるプロジェクト」です。

市や社会福祉協議会、市民活動団体などと連携した取り組みで、6〜7月に3度の「フードドライブ」を実施。これは未使用の食材や食べ物を、困っている人へ寄付すること。初回は市の暮らし相談窓口で窮状を訴えてきた人を対象に実施。レトルト品やお菓子など約4000点が集まり、47世帯に配布しました。また、仕送りやバイトがなくなった一人暮らし大学生を対象にした回では、76人に配布、訪れた学生は「本当に助かります」と安心した笑顔に。プロジェクトでは今後、食が地域を循環できるような仕組みを作っていきたいと意気込んでいます。



▶食品の多さに驚きつつ、真剣に品定めし袋に詰めていく学生



コミュニケーションエンジニア
(株)イミカ
原田博一さん

長浜での市民活動に関する事業のアドバイスや講座の講師を務めていただいている原田さんに伺いました。

活動力アップのチャンスに

地域での暮らしにおいて、市民活動は豊かさや魅力を創り出すためにあります。今回のコロナ禍は、これらの延期や休止をもたらしました。しかし、ここに暮らし続けられると思える安心感や、暮らして良かったと思える充足感の源泉を損なわないためにも、変化に適応しながら活動を続けることが大切です。

ここで役立つのは、計画して・体制を整えて・実行するよりも、やってみて・学びに変えて・成長するという進め方です。なぜなら世界中の誰もがその答えを知らないからです。この先行き不透明な状況を、活動力アップのチャンスにする。そんな前向きな姿勢が、これからの長浜市を創る力になると思います。